'09-1-11

12

謡い方のポイント（第7回白謡会研究会）

神歌

言うまでもなく、能「翁」の謡曲部分。（能と謡で題名が異なるのは本曲のみ）。能も謡も、芸能というよりは祈祷に近いものであるから、正式に神歌を謡う場合は、予め舞台正先に注連縄を飾って神酒を献げ、天下泰平・五穀豊穣を祈念するのを常とする。

従って、シテ・翁はあくまでも荘重に、恭しく、ときに渾身の叫びにも似た発声が必要。千才はきびきびと、力強く。

役処も、地謡も共に、気迫が全てに優先する。だからといって、節扱い、緩急がどうでも良いという訳ではありませんが、文章化は避けます。詳しくはお稽古場でご一緒に。

須磨源氏

能としては、「融」同様、公達の颯爽とした舞（早舞）を見せることが眼目となる。但し、素謡としては、回顧の情はあっても、融のような人間臭さは希薄で、清清しさが先に立ち、初番目ものに近い曲趣であると考える。（大成版の格付けは四、五番目）

総じて明るく。クセは光源氏の経歴書のようなもので、文意の起伏に乏しい代わりに、甲グリが連続して出てくるなど、節付けには変化がある。甲グリのゴヤ三つ目のヲは、上音に落とさないで、クリ音でとどめ置くこと。キリのロンギは後半に軽快な感じが欲しい。

シテ＝前シテは、山賤ではあっても、品良く、但し、弱々しくならぬよう謡うべし。

二丁裏のサシ謡から、下歌、上歌にかけて、柔吟と剛吟とが交互になるので、それぞれの音程の違いをきちんと謡い分けることが肝要。

後シテは終始爽やかに。節付けは簡単であるが、シテの位を意識して、句と句の間合いは十分にとること。

ワキ＝本曲のように固有名詞（藤原興範）が付いていたり、白大口のようなフォーマルウエアで登場する場合は当然重くなる。但し、あくまでも、ワキはシテの引き立て役であるから、そのときのシテ役に合わせて、シテよりも重過ぎないように。

東北

伝えられるところの和泉式部は、華やかなキャラクターの持ち主で、恋愛歴も豊富であったらしいが、この曲では、典雅な趣のある梅花を点景としつつ、太鼓の入らぬ三番目ものとして、色香や華やぎよりも、落ち着いた情感を前面に押し出している。

透明感さえ感じさせる本格的な髷物であり、その昔、江戸城での初謡に高砂、弓八幡と並んで謡われたのも、むべなるかなと思わせるところがある。それ故に、クセ、キリにかけて、叙情的で、美しい盛り上げが出来ればシテも更に引き立つというもの。

シテ＝上記のような曲趣を踏まえて、あくまでも品良く、丁寧に、逆に、メリハリをつけ過ぎないで謡って欲しい。

三丁表の中音は、思い切って低めに出ること。四丁表のワキとの掛け合いでは気を掛け過ぎないよう。後シテの中音は幾分前のときより引き立てるが、あくまでも落ち着いた謡にすること。技巧面で難しい、六丁表の謡い（門の外・・）は注釈通りに「引き立てて」ではなく、しみじみと謡うこと。キリでは焦らないでじっくりと。

'07-11-4

ワキ＝旅僧とは言え、本格三番目もののワキであるから、浮き立つことなく、落ち着いた謡を聞かせて頂きたい。

鉢木

ドラマとしては出来過ぎであるが、豊富な季節感と随所にちりばめられた難易度の高い謡曲技巧を、理屈ぬきで楽しみたい。緩急、メリハリの利いた段謡は美しくさえある。

シテ＝何といっても、三丁表のシテの謡出しが大切。ここの一くさりの出来映え如何で、全体が良くも悪くもなってしまう。気を落ち着けて、自分が雪の原に佇んでいる情景を想像しながら謡うとよい。

詞が多いのも本曲の特徴であるが、八丁裏から段にいたるまでの詞は、一句、一句に思い入れと緩急がある。詞の巧拙次第で段の盛り上がりが決まるから、あなどらないで欲しい。ついでながら、「粟」は泡ではありません。

ロンギの謡（ツレも）は、それまでとは打って変わって、ごく静かに、しっとりと。

後シテは、またも変わって、精一杯引き立て、武士になりきって謡うこと。

ツレ＝技巧面では難しいところはないが、ドラマの役割は極めて重要であることを考えると軽々しくは謡えない。五丁表のカカル謡は夫（シテ）翻意させて、ワキを迎えにやらせるだけの、内に込めた迫力、情感が必要なところ。

海士

三級の格付けとなっているが、難易度は高く、役も地謡も共に実力が試されるようなところがある。心して謡いたい。

また、本曲の中心は段の部分と言ってよいが、前半の柔吟の平ノリ部分では、緩急、メリハリをつけること、後半の剛吟の修羅ノリではこけないよう注意すること。修羅ノリはどの曲でも概ね掛かった謡となるが、耳では、随分運んでいるように聞こえても、実際にはかなり重く、テンポの速い軽快な謡ではありません。

シテ＝前シテの海士は、最初はじっくりと、地味に。女性だからと言って間違っても引き立てたり、高調子にしないこと。六丁裏の語りあたりから少しずつ盛り上げていくが、節度を維持して欲しい。哀しい母親物語であることをお忘れなく。

後シテは慌てず、騒がず、厳かに。最後のノリ謡は一行にも充たない短いものだが、油断大敵、引き続いての地謡も同様であるが、極めて難易度の高いところ。心して謡って下さい。

子方＝大事な役柄で、謡の量も多いから、気を抜くことが出来ない。子方は総じて、高い調子で、ぶっきらぼうに謡うことを旨とするが、本曲では、落ち着いて、きっぱりと謡うことが望ましい。

従って後場でのシテとの合吟は、シテに合せながらも、ワキとしての個性を維持して欲しいもの。

ワキ＝ひたすら、淡々と、地味に謡うべし。

以　上